

国立大学法人 帯広畜産大学 イノベーションシステム整備事業 地域イノベーションクラスター プログラム(都市エリア型)の取り組み

(帯広畜産大学) 折笠 善文

帯広畜産大学は、1941年に帯広高等獣医学学校として開校されて以来、北海道十勝地方の畜産業、農業の拠点として機能してきました。2002年度から文部科学省の研究教育拠点プログラムに採択されるなど研究および教育の拠点としての役割を担うと共に、さまざまな研究や教育プログラムを推進しています。その中に産学官連携事業の都市エリア産学官連携促進事業があります。今回は、帯広畜産大学におけるこの事業についての取り組みを紹介します。

都市エリア産学官連携促進事業は、地域における科学技術振興を目指す重点施策の一つとして文部科学省が取り組む事業であり、地域の産学官連携の実績や研究開発の目的・段階に応じたさまざまな支援を実施しています。都市エリア産学官連携促進事業の特徴として、地域ならではの特性を活かすことを重視し、大学等に潜在する知識・情報を活用して新技術シーズを掘り出し、研究開発型の地域産業の育成や新規事業の創出を図るとともに、自立的かつ継続的な産学官連携基盤の構築を目指した事業です。

帯広畜産大学が取り組む十勝エリアは、耕地面積が約256,000 ha(全国の約5.5%)、農業産出額は約2,497億円(全国の約2.9%)を占めており、食料自給率は、およそ1,100%(カロリーベース)を誇る地域です(2008年度)。このような地域の特長を活かす研究を推進するため、民間企業や公設試験研究機関との連携が行われています。産業界からは日本甜菜製糖(株)、コスモ食品(株)、日本ハム(株)、エーエムアール(株)、学術機関からは北海道大学、愛媛大学、静岡大学、名寄市立大学、岐阜大学、公的機関として北海道立十勝圏地域食品加工技術センター、(独)農業・食品産業技術総合研究機構、北海道農業研究センターが参加しています。現在までに、十勝産農畜産物の高付加価値化に関する研究開発が進められ農畜産物加工残渣からの機能性素材開発などの成果が得られています。

これらの研究成果を基盤として、事業化を前提とした

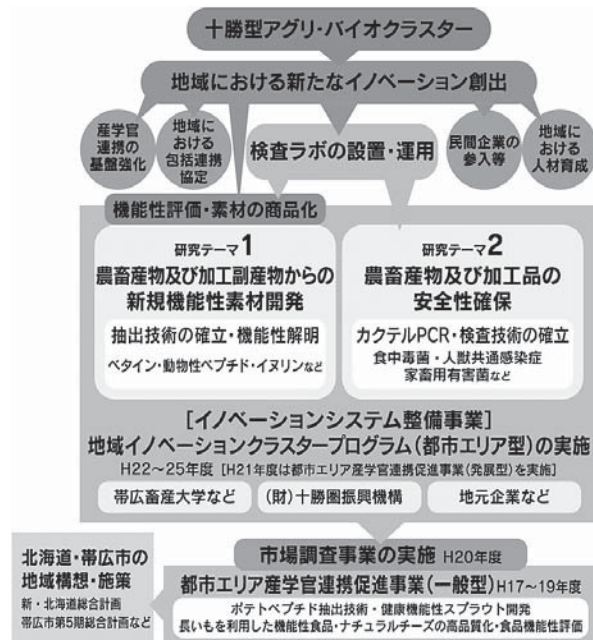


図1. 帯広畜産大学が担う十勝型アグリ・バイオクラスター形成のための2つの研究テーマ内容(中段左, 研究テーマ1; 中段右, 研究テーマ2)

研究テーマを絞り込み、発展型事業として2つの研究テーマが設定されました。中核研究機関である帯広畜産大学ではこれら2つの研究テーマを発展させることで、高付加価値で競争力のある食品産業群を中心とした十勝型のアグリ・バイオクラスター形成を目指します。研究テーマ1では、地域の農畜産物および加工副産物からの機能性素材の抽出技術を確立すると同時に、素材の機能性を解明することが目的となっています。具体的には、ビートベータイン、動物性ペプチド、天然イヌリンの抽出技術の確立と共に、それらの健康機能性、物理的・化学的機能性についての研究を進展させ、より高付加価値素材の開発を目指します(図1中段左)。研究テーマ2では、地域の農畜産物および二次加工品の食中毒菌検出のための簡易測定技術を確立するほか、網羅的食中毒菌の検査技術を用いた検査ラボの設置を目指すことが目的となっています(図1中段右)。

今後、世界的な食料需要の高まりから食料生産の重要性が高くなることが予想されます。その流れの中で日本の食料自給にとって十勝の大規模農畜産業および付加価値の高い農畜生産技術の発展は重要な課題と考えられます。地域に密着し産学官が連携して成果を求める本事業によって、日本の農畜産業の発展に寄与すると期待されます。